

跳びはねてもいい音楽会

バリアフリー公演

琉球フィルハーモニックオーケストラによる
第4回「ちゅ美らサウンズコンサート」記録&つくり方



ゆいまーるミュージックプロジェクトとは

「イベントは楽しみにしてるけれど、てんかん発作は予期できないから、

やっぱり行かないでおこうかなっていう葛藤は毎回あるんですね」

息子が難病であるひとりのお母さんは、屈託のない表情で話してくれました。

「だけど、美らサウンズコンサートではそんな思いがありません」と。

耳が聞こえない人、目が見えない人、難病の人、自閉症の人、車椅子やストレッチャーとともに生きている人、

知的障害の人、発達障害の人、認知症の人、小さな子ども…。

美らサウンズコンサートは、身体が動いたり、声が出る人も、どんな人も気軽に参加できる音楽会です。

その環境をつくるために結成されたチームプロジェクト。

想いを全国に広げることをめざしています。

跳びはねてもいい、寝転がってもいい
クラシックコンサートがあってもいい



コンサート当日の様子





1

受付

手をつないでおく必要がある人がいるので、受付が終わってから会場に入る直前にプログラムやアンケート用紙を手渡します。



2

ウェルカム演奏

うるま市民芸術劇場附属
うるま市ジュニアオーケストラ

楽な気持ちで会場に入ることができるように、ウェルカム演奏でお迎えます。



3

オーケストラ演奏 前半

リラックスできる曲から始めて、
しだいに盛り上がる曲に。



「グリーンズリーヴス幻想曲」
V. ウィリアムズ

組曲「ドリー」より
G. フォーレ

映画「E.T.」より フライングテーマ
J. ウィリアムズ

4

音楽療法 リズム遊び

集中力が切れてしまう人がいるので、休憩時間は取りません。
15分間のパフォーマンスでリラックスして後半へとつなげます。



高良 幸人
音楽療法士
児童デイセンターこどもの城ミュージック所長

赤羽 一則
琉球フィルハーモニックオーケストラ
客演打楽器奏者

5

障害のある歌い手 × オーケストラ

読谷山こずえさんはうるま市出身で、筑波大学付属盲学校高等部音楽科、武蔵野音楽大学音楽部声楽科卒業。現在、沖縄県立沖縄盲学校で後進の指導にあたっています。



読谷山 こずえ
ソプラノ歌手

歌劇「ジャンニ・スキッキ」より
「私のお父さん」
G. ブッチェーニ

歌劇「ルセルカ」より「月に寄せる歌」
A. ドヴォルザーク

6

オーケストラ演奏 後半

今回、会場となったうるま市の中学や高校などで音楽に関わる部活動をしている生徒の方たちにもご参加いただきました。



ゲーム「RPGタイム!～ライトの伝説～」
メインテーマ「始まりの鐘」

琉球フィル ゲーム音楽ディレクター
坂本 英城 楽曲提供

リコーダー & ピアニカ演奏
沖縄県立与勝高校・
与勝緑が丘中学校音楽部
那覇ジュニアオーケストラ有志

7

指揮者体験

指揮者と芸人の2つの顔を持つ“究極の二刀流”松元宏康氏による名司会のもと、子どもと大人1名ずつが体験しました。



カルメン 1、2 曲目より

前奏曲、アラゴネイズ、トレアドール、
ロマの踊り

G. ビゼー

※指揮体験は「トレアドール」

8

アンコール

障害のある人たちが興奮した状態で会場を出ないように、ラストはダイナミックな曲ではなく静かな曲で。



組曲第4番「モーツァルティアーナ」
第3曲「祈り」

P.I. チャイコフスキー

対象：障害・難病のある方、ご家族・介助の方、一般

会場：うるま市きむたかホール 入場料：無料

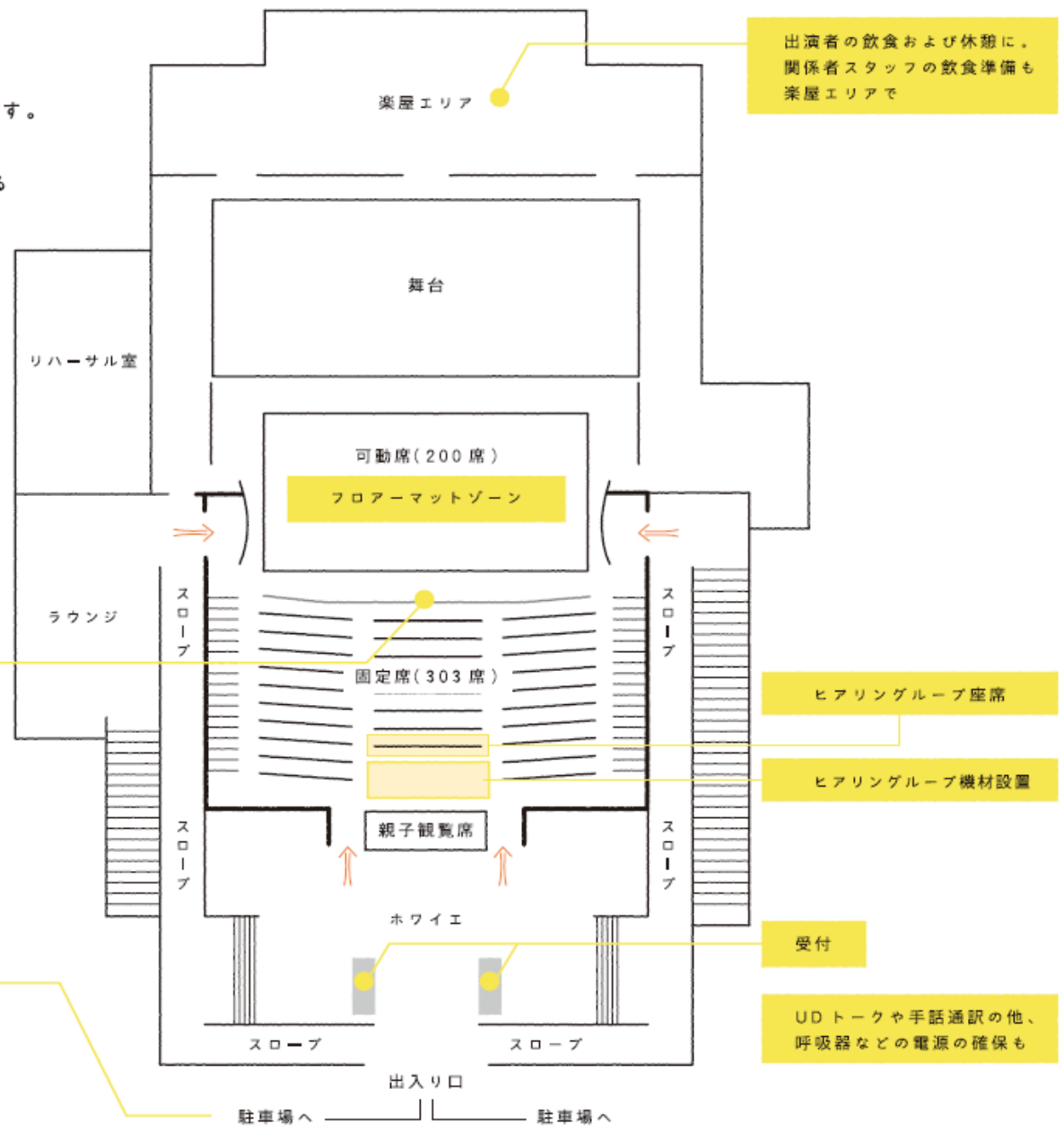
主催：文化庁 共催：うるま市教育委員会

後援：沖縄県、うるま市、沖縄県社会福祉協議会、うるま市社会福祉協議会、うるま市身体障がい者協会、琉球新報社、沖縄タイムス社、NHK 沖縄放送局、琉球放送、琉球朝日放送、沖縄テレビ、ラジオ沖縄、(株)エフエム沖縄

受託・制作：一般社団法人 琉球フィルハーモニック

会場は、沖縄県うるま市にある「きむたかホール」。
 美らサウンズコンサート 4 回目にして初めてホールでの開催です。

このホールの特長のひとつは、ステージと同じ高さに揃えられる
 可動席があること。
 そのためオーケストラの演奏者と同じ目線の位置で、
 演奏を楽しんでいただくことができました。





車椅子で来場される方の介助ができるスタッフを配置



感染症対策



写真に写りたくない人には「撮影NGリボン」を配布



耳の不自由な方ともスムーズにやりとりのできる仕組みを取り入れています



スムーズに入場していただくため、受付はQRコードなどを活用



演奏の聴こえがよくなるヒアリングループを用意。希望者に利用していただけるようにしています



客席前方をフラットにし、車椅子やストレッチャーの方、乳幼児連れの方が座る場所を自由に選べるように



ボランティアを含む全体ミーティング。一人ひとりがコンサートの成功に欠かせない大切なスタッフです



コンサートではUDトークも活用します



各リーダーのもと、事前の確認をします



マスク着用困難な方へのお知らせ



終演後に書いていただくアンケートは次の開催にむけてのヒントが満載。訊ね方も工夫を重ねます

やっぱり行かないでおこうかなっていう葛藤は他のイベントでは毎回あるんです。

Nさんの声

「車椅子って通常は席が選べないので、ホール中央の端っこというのが王道なんですよ」

Nさんの息子さんは24歳。結節性硬化症という難病で、てんかんの合併症があります。幼少期のてんかん発作で脳にダメージを受け、肢体不自由になり知的障害という状態。

てんかんはいつ起こるかかわからず「やっぱり行かないでおこうかな…」といういつもの葛藤を経て、初めて「美らサウンズコンサート」会場を訪れた時、受付をしたら好きなところに座ってくださいと言われ、Nさんは戸惑いました。

「すごく衝撃的というか。こんなことあっていいんですか！という感じ。車椅子はこちらですって誘導されるものだと思っていましたよ。息子が見やすい位置を選べたし、おむつの交換もあるので、自由に出入りできることもとても助かりました」

息子さんは言葉を発することがなく、手をよく叩きます。本人に意味とベースがあるとわかりつつも、他のイベントでは「まったく場違いなところで」拍手をすると、Nさんは制止します。

「でもこのコンサートでは音を出してもいい。興奮すると足をばたつかせて車椅子がすごく揺れるんですけど、本人の表現だと自由にさせてあげられるんです。やってる、やっ

てるって。自閉症の飛び跳ねるの子たちを見ても、そうだよ、いいんだよって、すごくいっしょに嬉しくなる。こちらがナーバスになってると、音楽を楽しむより人目を気にしている時間が多いので、息子に伝わり、指を噛んだり、頭をかきむしったりするんですが、親子ともども音楽に癒やされる場になっているのを痛感しています。てんかんが起きても皆さんが声かけしてくれるだろうなあという安心感があります」

コンサートでは中間にリズム遊びと指揮者体験を挟みますが、Nさんからの希望は、オーケストラの楽器一つひとつの音を聞かせてほしいというものでした。特別支援学校には木琴や鉄琴などの楽器も少なく、肢体不自由の子どもはそもそも音を鳴らすことができません。

「同じ弦楽器でも高い音、低い音があること。触れ合う機会がない、身近にない楽器の音を五感で楽しめると、重度障害者の親としてはよりいっそうみんなといっしょに参加できる感覚になります」



コンサートへ

参加者から聞いた声

出かけることへの壁

視覚障害だと演奏会に行くのはハードルがある。視覚障害で音楽が好きの方がいっぱいいると思いますが、中々足が運べない。一番大きいのは自分で動けないということ。同行援護という制度があり、その場所まで案内していただくのは可能でも、ホールの中の動きが少し心配。

他のコンサートでも車椅子対応は良い。でも障害者用の駐車場が少なく、公共交通機関で来てくださと言われても。シャトルバスが出ていても車いすが乗れなかったり、介護タクシーがつかまらなければ大変。

気軽に参加できるコンサートが少ない(情報が無い)。

一般のコンサートの中に、 障害者がいても、子どもがいても大丈夫という着地点。

S さんの声

S さんの 25 歳と 21 歳の息子さんはともに小頭症でてんかんをもち、重度の知的障害があります。

小学生の時のこと。

「6年生の時、担任の先生がいっしょにサッカーをやろうと言ってきて、子どもたちが障害のあるうちの子といっしょにサッカーをするためのルールを決めたんですね。息子はキックができないから手で触ってOK、うちの子が転がしたボールは蹴ったらだめという。そうしたらうちの子が持ったらだいたいゴールが入るので、子どもたちが気づいたんですよ。おもしろくないって。それでお互いがある程度楽しめるルールに変えてくれていったんです」

コンサートも偏りすぎないところでとどまってほしいという思いを S さんは抱いています。障害者や子どもだけが集まるコンサートにはなってほしくない。一般のコンサートの中に、障害者がいても、小さい子どもがいても大丈夫という着地点であってほしい。

そのために、コンサートの冒頭で、声を出したり、走り回る人も聞きにきていることのアナウンスがあるといいのではと S さんは言います。

また歌い手は障害者だけでなく、もう一人は健常者にすれば、交流の場になるのでは、とも。

今回のコンサートはホールという場で音楽を聞くという経験ができ、息子さんたちは身体を揺らし、食いついて見聞きし、音楽を楽しんでることが伝わってきたそう。好きなリズム感のある音楽だけではなく、静かな曲を聞いたこともまた経験。

「お手洗いにいった時、そこまで音楽が届いていました。自閉症のお子さんだとか会場にいるのが無理な場合でも、聞ける環境。子どもたちの逃げ場もありながら、音楽もそこにあるという感じがすごくいいなと思いました」



オペラが分かりづらく、退屈する子どもたちもいたと思う。もっと知っているような曲があれば、もっと楽しめた。クラシック音楽だけでなく、J-pop へのアレンジ、映画音楽や時期的にもクリスマスソングなどもあったらよかった。

美術イベントだと以前はパートナーについていただいて、その方に美術の説明を言葉でしていただくという取り組みがありましたが、沖縄ではほとんど見られなくなっています。またやってほしい。

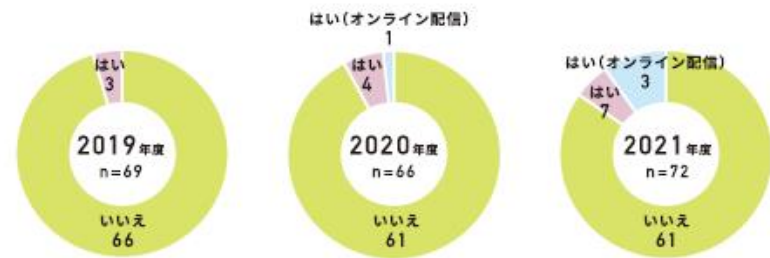
コンサートへ

参加者から聞いた声

出かけることへの壁

コンサートの評価調査

美らサウンズコンサートへの参加経験や意向についてたずねました。



来場の手段と問題点の有無についてたずねました。

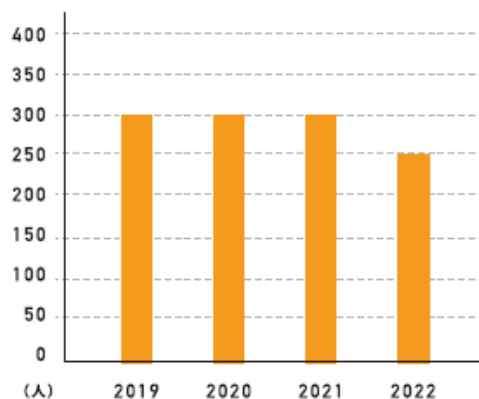


一緒に来た人についてたずねました。



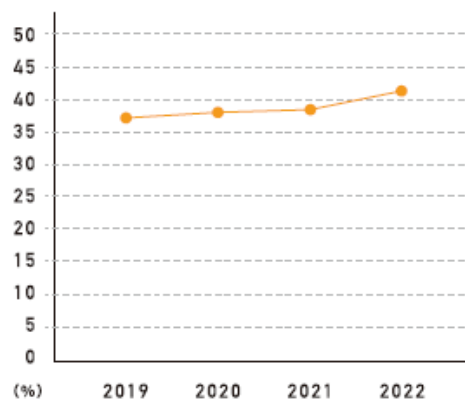
参加人数の推移と、普段、芸術文化に触れる機会について

来場者推移



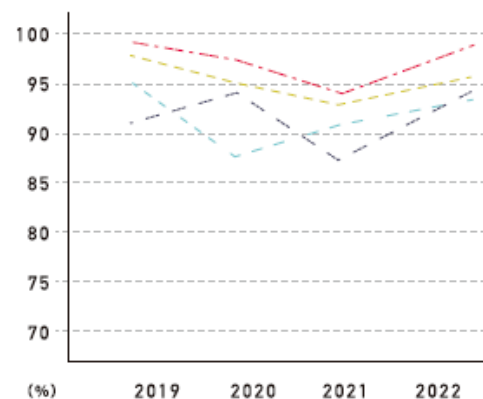
参加人数は、ホールや場所の違いによらず、毎年、数百名規模を維持。

来場者の内、普段、芸術文化に触れる機会が「少ない」と感じている方の割合



来場者の内、35～40%の方が普段、芸術文化に触れる機会が少ないと回答しています。このことから、本公演は参加の機会が限られている方も参加しやすい傾向にあります。

コンサートの感想

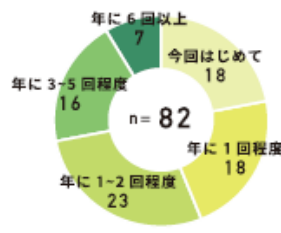


主要結果はいずれも85%を超える肯定的な回答を維持。なかでも「コンサートにまた参加したい」、「安心して参加できた」は常に90%以上を維持。

日頃の芸術文化の機会についてたずねました。



日ごろ芸術文化の機会充実があると思いますか

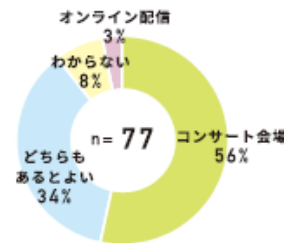


日ごろの芸術文化の鑑賞・参加機会の頻度は



今までの音楽の演奏経験

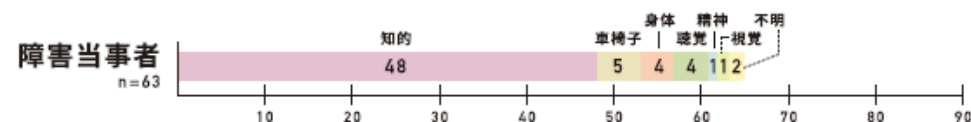
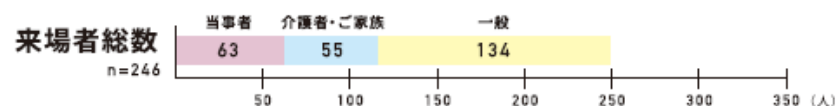
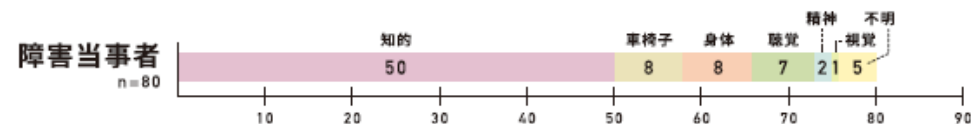
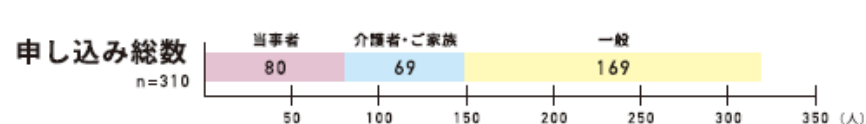
今後のコンサートのあり方についての希望



「やはり生の音楽に元気をもらえる」など、コンサート会場を希望する声が半数を超えました。

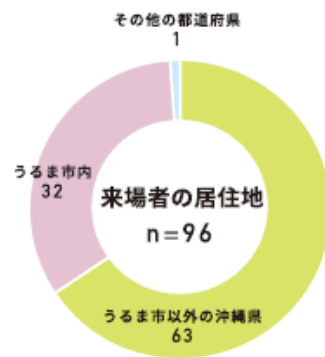
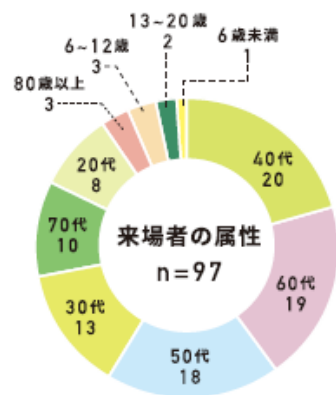
加えて、「体調のすぐれない場合や、障害の種別によってはオンライン配信もあった方がよい」など、どちらもあるとよいという声も3分の1程度ありました。

申し込み者数と来場者数



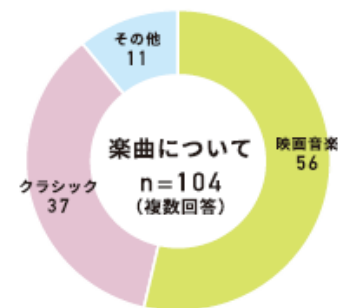
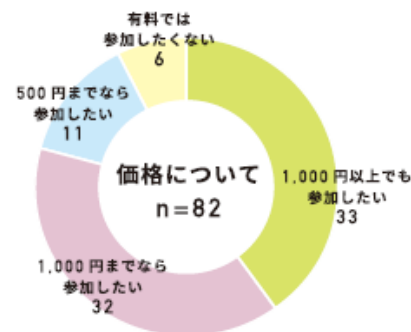
来場者の総数のうち、当事者と介護者・ご家族が約半数を占め、障害種別では知的障害を持つ方が最も多く、約7割でした。

来場者の属性についてたずねました。



40~60歳代が約2割ずつと最も多く、居住地はうるま市だけで約3割を占めます。

今後のコンサートへの希望をたずねました。



有料でも参加したいという回答は9割以上、特に「1,000円以上でも参加したい」「1,000円までなら参加したい」の回答が約8割ありました。

評価調査を担当した一般社団法人 CoAr 落合 千華氏の総評

美らサウンズコンサートは障害者の方を含め全ての方に向けたコンサートとして、今年で開催4回目を迎えました。2019年度より3か年与那原町で実施され、来場者の方から「ずっとこのようなコンサートをやって欲しかった」といった声を頂き、障害のある方も持たない方も、安心して参加できる場として評価されてきました。

2022年度はうるま市きむたかホールに場所を移して行われました。今回も約250名の方が来場され、アンケートで9割以上の方が「また参加したい」、「安心して参加できた」、「多様な人への理解が深まった」、「今後芸術文化の機会を増やしたいと思った」と回答しています。また、コンサートを制作する側のスタッフやボランティアの方も、アンケートで9割以上が「また参加したい」、「多様な人への理解が深まった」と回答しました。4年間の結果を見ると、普段芸術文化に触れる機会がない方が毎年4割程度含まれていることがわかり、機会の少ない方にも来場しやすいコンサートとして認識されていることが示唆されました。また、「安心して参加できた」と回答する方は4年間、いつも9割を超えています。

美らサウンズコンサートが多くの方にとって安心して参加できるコンサートであると認識される理由は何が、今年度実施したインタビュー(当事者やご家族の方に1対1で深くお話をうかがう形式)からその理由がわかってきました。

一般のコンサートと比較すると、美らサウンズコンサートの特徴として

- ①行くまでのハードルが低い(暗黙の裡に感じる不安のなさ)、
- ②移動や座席選択の柔軟性が高い、
- ③多様性を受け入れている土壤がある、といったことが挙げられました。

一般のコンサートでは、楽しめないかもしれないという漠然とした不安から、前日に行くのを辞めてしまうこともあるという一方、美らサウンズコンサートでは事前に行くことを迷うこともなく、会場に着いた瞬間からその声掛けやサポートの多さに、会場を移動するだけで既に感動がある、といった声がありました。また、待つ時間がないので知的障害のある子どもが不機嫌になるなどの心配がない、という声もありました。単に物理的にバリアフリーであることや障害者のためと書くだけでなく、コンサートに関わる全ての人が、互いに安心して楽しめるよう思いやれる関係性を作ることが、安心して参加できるコンサートの実現に重要なのだと示唆されました。

丁寧な設計と運営が可能な理由は2つあると考えられます。1つは、障害のある方や支援団体の方、行政、大学の方など多様なメンバーで構成される「プロジェクトメンバー」が対話を繰り返し、その上で多くのボランティアの方々と共にこのコンサートを作り上げていることです。写真を撮られたくない方にはリボンを渡す、入り口に数多くの学生ボランティアがいて、声掛け・サポートを迅速に行うなどといったきめ細やかな動きはこうした体制がなければ実現できないことだと考えられます。もう1つは毎回振り返りをし、改善を続けているということがあげられるでしょう。来場者からの声を真摯に振り返り、例えばコロナ禍でもオンライン配信を組み合わせる(2021年度のうるま市公演はオンライン配信を実施)など、新たな挑戦を続けています。

平成30年に障害者による文化芸術活動の推進に関する法律が公布、施行され、「国民が障害の有無にかかわらず、文化芸術を鑑賞し、これに参加し、又はこれを創造することができるよう、障害者による文化芸術活動を幅広く促進すること」、「住民が心豊かに暮らすことのできる住みよい地域社会の実現に寄与すること」などが基本理念として掲げられています。美らサウンズコンサートの実施には県外からも関心が寄せられ、2022年には、新潟市アーツカウンシルからの協力依頼により、本アンケートが障害者向けの音楽ワークショップのアンケートに参考に活用されました。このような広がりや、本コンサートが多くの人と共にコンサートにおけるあらゆる障害を想像しながら、コンサートの在り方を考え、一つ一つ丁寧に実施してきたからだと考えます。

今回も来場者の方から、毎年の楽しみになっている、有料になってもいいからぜひ続けてほしい、障害者の方による美術と連携してほしいなど、期待の声が寄せられました。来年度以降も来場者やプロジェクトメンバーと共に、美しい音楽の響き合う「美らサウンズコンサート」を作ってゆくのだと思います。引き続き沖縄県内で実施してゆくと共に、類似の取り組みをする県内外の組織や個人に共有してゆくことで、障害のある方にとってより多くの機会が開かれること。そして、障害の有無に関係なく、コンサートに来ることで日々を前向きに、元気に過ごす方が増えてゆくことを期待します。

仲根 建作
NPO法人沖縄県脊髄損傷協会 理事長

渡久地 準
NPO法人美ら島きこえ支援協会 情報支援担当

照屋 尚子
おきなわふくし オンブズマン

島村 聡
沖縄大学人文学部 福祉文化学科 教授

宮城 潤
那覇市若狭公民館 館長

読谷山 こずえ
ソプラノ歌手/視覚障害者

謝花 勇武
シンガーソングライター/脊髄性筋萎縮症

上間 優
うるま市教育委員会

高良 幸人
児童デイセンターこどもの城ミュージー 所長/音楽療法士

樋口 貞幸
ファシリテーター/一社)琉球フィルハーモニック 理事

上原 正弘
一社)琉球フィルハーモニック 代表理事

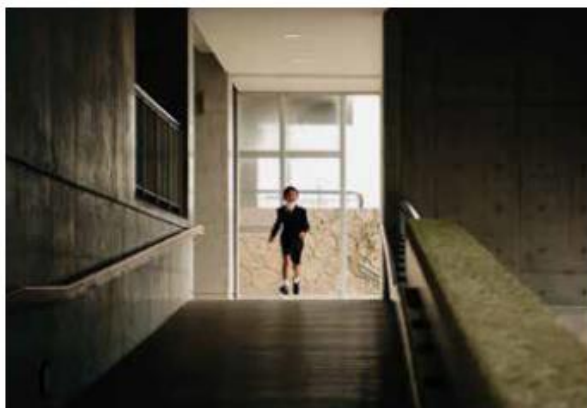
文化庁委託事業
「令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業」
ゆいまるミュージックプロジェクト

<https://orchestra.ryukyuphil.org/yuimaru-music-project-materials/>



発行
一般社団法人 琉球フィルハーモニック
901-0156 沖縄県那覇市田原1-12-6
tel 080-6497-8049

写真：仲根 勇太
編集・デザイン：アイデアにんべん



一般社団法人 琉球フィルハーモニック

一般社団法人 琉球フィルハーモニックは「音楽と共にまちと響きあう」を理念に、プロ演奏家の活動の場として「琉球フィルハーモニックオーケストラ」「琉球フィルハーモニックジャズプレイヤーズ」と、子どもたちの育成の場として「那覇ジュニアオーケストラ」、音楽による子どもの居場所づくりとして「ジュニアジャズオーケストラおきなわ」の運営を行っています。さらに2019年4月より福祉部門を新設。同年7月には音楽療法に特化した、全国でも数の少ない個別療育支援のための「児童デイセンターこどもの城ミュージック」(児童発達支援・放課後等デイサービス)を開所しました。

これまでに琉球フィルハーモニックオーケストラによる離島・へき地公演「県民クラシックコンサート」やバリアフリー公演「美らサウンズコンサート」等、琉球フィルハーモニックジャズプレイヤーズによる離島やへき地でのジャズコンサートやワークショップ、2015年より「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興記念賞」を6回受賞して「響け！復興へのハーモニー～つながる未来～」岩手・宮城・福島・沖縄の子どもたちによる合同オーケストラコンサート」を沖縄と宮城で開催するなど、多岐にわたる音楽活動を行っています。2020年11月にはこれまでの活動が認められ、「沖縄県SDGs普及パートナー」として登録されました。これからも行政・地域住民・企業等との意見交換や連携により、SDGsを意識した取り組みを積極的に行い地域社会とともに持続発展する未来づくりに貢献してまいります。

